

第19回絵本翻訳コンテスト
最優秀賞受賞作品

『いのちとみずの、ひとしづく』

イネス・カステル＝ブランコ さく

片山 真衣子 やく

はじめは、水でした。

水のおかげで、最初の生命が誕生したのです。

水は、生きています。

植物や、動物、それから人間とも違って、

水は決して死ぬことはありません。

すべての水は、ひとつの水なのです。

つねに動きつづけ、その形を変えつづける水は

どんな水もただひとつの水なのです。

たくさんの人びとが、水には外がわだけでなく、内がわもきれいにする力、心を浄化する力と、新たに生まれ変わらせる力がある、と信じています。

だから人びとは、ミサのある聖祝日や、聖堂や寺院に入る前には洗礼を受けたり、聖なる川で身を清めたりするので。

けれども、水がすさまじく怒ったときは、洪水をおこして家や町をのみこみ、田畑をめちゃめちゃにして、木々は根もとからなぎたおし、小さなボートをひっくり返して、いのちを奪うことだってあるのです。

よく比べられるのが、人の一生と一滴の水のしづくの運命です。

水のひとしずくが海にしたたるとき、何が起こるのでしょうか？

1 人の人間の命が終わるときには？

それに答えるために、まず私たちは自分自身に問いかけなければなりません。

私たちは水のしずくなのでしょうか...

...それとも、しずくのなかの水なのでしょうか？

海にしずくがおちるときを見てください。

しずくは、そのひとつひとつのかたちがこわれて、しずくではなくなってしまいます。

ぱっしやああん！

この小さなしずくの運命をひとりひとりの一生にかさねてみると、

しずくは、いくらかの時間を過ごしたあと、ある日、海や川に溶けて消えてしまい、しずくの人生は死をもって終わることになります。

では、こんどはしずくのなかの水に注目してみましょう。

水のかたまりにしずくのなかの水が混ざっても、どうってことはありません！

水は水のまま存在しつづけています。

いつの日か海へとかえるしずくの水は、その形がばらばらに溶けてなくなっても、水でなくなるわけではないのです。

西洋では、私たちはおたがいに、みんながそれぞれちがう、小さなしずくたちだと考えられてきました。

ある人びとは、しずくのかたちが消えたときに全てが終わると考えています。

また、ほかの人びとは、海に到着したしずくは、かつてのしずくひとつひとつの個性を失うことなく、永遠にしずくのかたちのままで結晶するのだと考えています。

けれども、東洋では、全てのしずくを作りだす、水について、より深く考えます。

水は、気体となって雲までのぼり、また別のかたちのひとしずくとなって戻ってきます。そしてこれをえんえんと止まることなく、くりかえすのです。

そうです、すべての水はひとつなのです。でも、その水のすべてが同じというわけではありません。

水は、

あつかったり つめたかったり

甘いや しょっぱいや

澄んでいたりにごっていたり...

それぞれの水は味わいも見ためもちがっていて、それがそれぞれの個性となっているのです。

私たちのように！

私たちはいつの日か海にぼとりとおちる、水のひとしずくなのです。

熟しきった果実がそうであるように。

すべての花びらを開ききった花がそうであるように。

たしかにそのときどきで、たくさんのがちが変化したり、すがたを消したりします。

でも水は、水のままでありつづけます。

しずくが水を運んでいるように、私たちはいのちを運んでいるのです。

そしてそのいのちは、海の水のように、生きつづけるのです。

※本テキストは、関西カタルーニャセンター主催「第19回絵本翻訳コンテスト」において最優秀賞を受賞した翻訳作品です。個人的な閲覧目的以外での利用、転載、複製などをご遠慮いただきますようお願いいたします。